
二等辺三角関係

ざらめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二等辺三角関係

【Nコード】

N51880

【作者名】

ざらめ

【あらすじ】

有名進学塾、英等塾の生徒、白咲城柚貴、末田涼祐、品川聡治は、同じAクラスの「親友」として、いつも一緒にいた。しかし、ある事をきっかけに、その「親友」達は、恋愛の対象や、恋敵になり始める……。

はじめに

登場人物

白咲城柚貴：容姿端麗、頭脳明晰。ただ、毒舌。綽名は姫。

末田涼祐：文武両道のイケメン。柚貴の様に毒舌。綽名は末ちゃん。

品川聡治：イジラレキャラで、ぽっちゃり体型。アニメ好きだが頭は良く、内面は草食系。綽名は品ちゃん。

中島佳一郎：Bクラスに新しく入って来た生徒。顔、スタイルが抜群。

千代田英理：Bクラスにいる柚貴の親友。

小泉翔悟：Aクラスの算数、aクラスの理科の教師。関西人。

物語を読む前に

英等塾では、クラスは算数と国語は3つ、理科と社会は2つにわけられます。(A・B・C、a・b)算数と国語ではAが最も良いクラスで、柚貴、涼祐、聡治の3人です。理科と社会ではaの方がよく、柚貴、涼祐、聡治と、佳一郎や英理もこのクラスです。

はじめに(後書き)

柚貴の綽名の由来がわかったら、感想に書いて下さい。ヒント：姫は、姫路城の姫です。

きっかけ(前書き)

登場人物は、ほとんどが小5です。

きっかけ

柚貴は9月19日午後4時33分、英等塾の廊下を歩いていた。

「はあ。」

柚貴はため息をついた。なぜなら、前の授業で出された宿題が、満点じゃなかったから。

（しかしそれは、有名中学の入試問題の過去問で、相当難しい応用問題だった。）

あの学校は、私の志望校の白菊学園よりもレベルの低い学校なのに、満点が取れないなんて……。

柚貴は心底落ち込んだ。

（まあ、5年で入試の満点取るなんて、無茶な話だ。）

もし私のファン達にしたら、どうしよう……。

（柚貴にはファンクラブがある。総勢約50人。）

そんな事を考えながら、柚貴はふと、Bクラスの教室をちらりと見た。

柚貴は、自分の体が固まるのを感じた。目の前の風景がにじみ、頬に熱いものがこぼれた。

きっかけ2

丁度その時、柚貴の後ろには、涼祐と聡治がいた。2人はたまたま道で会ったので一緒にいたのだが、立ち尽くして泣いている柚貴を見て、立ち止まった。そして、柚貴が知らない男子を見ているのに気づき、それぞれ想像を膨らませた。

>あれ？姫、泣いてる……。どうしたんだ？もしかして、あの男子にいじめられたりしてたのか？もしそうなら、俺あいつの事絶対許さねえ……。って、俺、なんでこんなにむきになってるんだ？俺、柚貴の事、そんなに……。<

>あつ……。姫、泣いてる……。？ていうか、あの男子誰？柚貴、あの男子となにかあったのかな？もしそうなら、僕、柚貴の事守りたい……。！あれ？僕、こんなに柚貴の事、意識してたっけ？<

きっかけ3

すると、柚貴がいきなり後ろを振り向いた。

「あっ！末ちゃん、品ちゃん！何そんなトコに突っ立ってんの？」

「お、お前こそ・・・。」

涼祐の言葉を無視して柚貴は続けた。

「ねえ、教室行こ！」

英等塾の教室は、学校の教室と似ている。違うのは、広さぐらいだ。

Aクラスでは、席は決められていないが、みんな（と言っても3人・

・・・）大体同じ席に座る。

3人が席に座って雑談をしていると、小泉が入ってきた。小泉は、

教え方が良く、優しい上に面白いので、人気がある。

「みんな〜、授業始めんで〜。」

きっかけ4

授業が終わり、涼祐と聡治は2人で話していた。

「授業中、姫、なんか変だったな。ぼーっとして、筆箱の中身を床にぶちまけたり、先生に当てられても答えられなかったり。授業が終わってからも、いつもは俺達と喋ってるのに、今日はサッサと行っちゃったし。」

「もしかして、アノ男子が絡んでんのかなあ。」

「そうかもな。2人で、姫の事つけて行ってみようぜ。」

「OK。」

2人は、柚貴を探した。柚貴は、英等塾の建物の入り口にいた。聡治の予想どおり、アノ男子と一緒に。

英等塾の入り口には、まず外に階段があり、それから自動ドアを抜けると、階段とエレベーターがある。

柚貴とアノ男子は、外の階段の下で話していた。涼祐と聡治は、気付かれないように、中の階段の所で柚貴と男子のやりとりを見守る事にした。しかし、ドアがあるので、声は聞こえなかった。柚貴は、涼祐達に背中を向けているので、表情は見えなかったが、男子のにやけた顔は見えた。涼祐と聡治は、真剣だった。すると。

「あれ、末田君、品川君、何してるの？」

後ろから、英理が話しかけてきた。涼祐と聡治は、びっくりして、階段から落ちてしまった。その音には、柚貴達も気付いた様で、振り向き、柚貴は走り去ってしまった。男子も、その後を追った。その後ろ姿を、涼祐と聡治は あゝあ と思いながら、英理は、> ?< と思いながら見送った。

> 俺、姫の事、心配したんだよな。好きなんて事、絶対に・・・あるかも。 <

> 姫、カツアゲでもされてたのかなあ。アノ男子にやけた顔が、頭に焼き付いてる・・・。 ああもう！姫の事が頭から離れないよお！

頭から離れない・・・？僕、やっぱり姫の事・・・好きなんだ・・・
<

2人の頭の中で、モヤモヤしたものが渦巻いた。

恋敵（前書き）

真に勝手ながら、はじめにときっかけ4の最後を編集させていただ
きました。

聡治はもじもじしながら言った。

「僕も姫、好きなんだよ。」

「はあくん。2人は恋敵つちゆう訳やな？」

「まあ、こんなブタより姫が俺を選ぶのはわかりきってるけどな。

じゃ、そういう事で、さよなら！」

涼祐は駆けて行ってしまった。

「まあ、お前は優しいから、勝てる可能性は十分にある。頑張れよ

！」

「はい……。」

聡治は気の抜けたような返事をして、帰った。

告白×2

(はぁ、はぁ)

涼祐は、階段を駆け下りていた。

その理由は・・・遡る事約30秒前・・・。

涼祐は、授業が終わったので、片付けをしていた。

「ねえ、末田。」

聡治が話しかけてきた。

「あ？」

「ぼ、ぼ、僕。」

聡治は震えて、真っ赤になりながら言った。

「きよ、今日、ひ、姫に、こ、こ、こ。」

その様が鶏の様だったので、涼祐はからかってやろうと口を開こうとした。が、その時。

「告白しようと思うんだ。」

涼祐は、そんなに動揺していないようなふりをしていたが、内心焦っていた。

「だ、だから？」

涼祐は、気にしていないように言った。

「そ、それで、僕、先生に呼ばれてるから、建物の前で、姫を待たせてるんだけど・・・。」

「用が無いなら帰るぞ。」

涼祐は静かに歩き出した。が、聡治が視界に入らなくなると・・・轟音が階段に響き始めた。

そして、今に至る。

扉が見えた瞬間、涼祐は階段を飛び出した・・・が、運動神経抜群の涼祐のこと、まるで体操選手のように、華麗に床に降り立った。そして、扉を抜けると、柚貴がいた。

「あれ、末ちゃん、どうしたの？珍しいね、そんな息・・・。」

「俺、お前が好きだ！」

涼祐は、柚貴の言葉を遮って言った。

「え？」

「姫、お前、変な男子に、つきまとわれてるだろ！」

「何の事？」

「誰にも言うなって言われてる事はわかってる！俺、それがわかって、気付いたんだ！姫の事が好きだって！」

「ちよつと、末ちゃん、それ……。」

「姫！」

大きな声がした。それは、聡治だった。

「末田！走り出したのを僕が見てないとも思ったの？！視力1・

5だよ！」

「なっ！」

聡治は駆け寄って来て言った。

「姫、僕、姫が、好きなんだ！どうせ今、末田にも、そう言われたんでしょ？」

「そうだ！悪いかつ！」

「悪いよっ！」

「ちよつと、2人とも！」

柚貴が仲裁に入った。

「話す事があるの。それに必要な人を呼んで来るね。」
柚貴は走って行った。

3人目

(はぁ、はぁ)

柚貴は、走っていた。佳一郎を待たせているコンビニへと。ただ、なんだか気まずそうだったので、走っていると叫んでも、マラソン程度だ。

佳一郎は、コンビニの前で、暇そうに待っていた。

「あつ、柚貴！」

嬉しそうに言う佳一郎を見て、柚貴は心底気まずいと思った。

「悪いんだけどさ、佳ちゃん、ちょっと来てくれる？」

「え？」

驚く佳一郎の手をつかみ、柚貴は走り出した。

「姫、遅いね。」

聡治の言葉を聞き、涼祐は、KYとはこの事だと思った。

「所でお前さー。」

涼祐は口を開いた。

「俺が走り出したのに気付いたって言っただろ？」

「うん。」

「なのになんですぐ来なかったんだ？」

「え？すぐに全速力で走って追いかけたけど。」

涼祐は呆れて言った。

「まあ、豚の全速力って言ってもな。」

聡治が言い返そうとした時。

(タッタッタッタッタッタ)

なんと、柚貴とあの男子が、手をつないで走って来たのだ。

「姫！」

「説明に必要な人って、そいつ？」

「うん。そうだけど。」

柚貴は話し始めた。

正三角関係

「私と佳ちゃん、あ、この人ね、は、同じ小学校の、同級生だったの。でも、佳ちゃんが転校する事になったの。それで、私、佳ちゃんの事……。」

柚貴は、頬を赤らめた。

「柚貴が、オレの机の中に、メモを入れといてくれたんだ。」

佳一郎が続きを話した。涼祐は、こいつ、意外と空気読めるなあと思った。

「でも、オレが気付いたのは、最後の日の夕方、柚貴はもう帰ってたんだ。」

「で、メモにはなんて書いてあったの？」

聡治の言葉に、涼祐は呆れ返った。

「お前ホントにKYだな。どうせ、好きですとか書いてあったんだろっ？」

涼祐はなげやりに言った。柚貴と佳一郎の顔が、真っ赤に染まった。

「えー！というか、なんで末田が知ってるの？」

「お前なあ。」

涼祐は、言い返す言葉さえ見つけられなかった。

「それで、佳ちゃんが、英等塾に通い始めて、メモの返事をくれたの。それで今、私達……。」

柚貴は少しためらってから言った。

「付き合ってるの！」

涼祐は、ちよつとがっかりしてしまった。聡治はというと……打ちひしがれて、放心状態だ。

「だから、2人の告白は嬉しいんだけど……返事はNOよ。それに……。」

柚貴は微笑んだ。

「もし佳ちゃんがいなかったとしても、私は、2人の内どっちかな

んで、選べない。だって……2人とも、大好きだから！友達として……ね。だから、末ちゃんも毒舌抑えて、仲直りして。」
この笑顔に、勝てる者はいないだろう。というほどの笑顔を、柚貴は涼祐と聡治に向けた。涼祐は、放心状態から少し回復した聡治に、歩み寄った。

「なあ、仲直り、するか？」

「もちろん！しないわけ、ないだろ！」

「よかった。じゃあ、私達、そろそろ帰るわね、バイバイ！」

柚貴と佳一郎は、帰って行った。

「ねえ、そう言えばさ。」

聡治が口を開いた。

「最近の僕達って、二等辺三角形みたいじゃなかった？」

「あっそう言えばそうだな。でも、これからは、今まで通り、正三角関係で行こうぜ！」

夜の街に、2人の少年の笑顔が輝いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5188o/>

二等辺三角関係

2011年10月8日01時21分発行